



vol.
160

今月のお題
.....

最新天文学を伝える

最新天文学を効果的に伝えるにはどうするか。国際研究会でそんなワークショップが開催されたので、参加してきました。

高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台チリ観測所)



グループワークでフェイクニュース対応を議論中。
写真提供: IAU Office for Astronomy Outreach

飛行機を一歩出た瞬間に体を包む熱く湿った空気。超高層ビル台北101の足元で開催された国際天文学連合アジア太平洋地域会合 (APRIM) に参加するため、筆者 (平松) は台北を訪れました。3年間台湾に住んでいましたが、久々の暑い歓迎が体にこたえます。

今回のAPRIMでは、「最新天文学をどのようにコミュニケーションするか」をテーマにした特別セッションが企画されました。最先端の研究施設を使った画期的な研究成果が続々と出てくる中、学校で学ぶ宇宙や日常生活で意識する宇宙と最新天文学との距離が徐々に離れていき、成果を効果的に伝えにくい時代になっているのではないかと、という危惧が背景にあります。またフェイクニュースが蔓延する時代の到来も見逃せません。

30名ほどの多様な参加者が集まった特別セッションでは、研究機関が発行する研究成果プレスリリースの実情を筆者

がアルマ望遠鏡を例に紹介しました。また、天文学の番組や記事を作った経験を台湾のテレビディレクターやネットメディアの編集者が紹介したほか、インドネシアでのSNSの活用、タイでの天体観望会など、天文学を伝える実例と課題が紹介されました。ポイントは、日常生活にいかに関わり添うか。例えば研究者の素顔に迫る、太陽系など比較的なじみのある話題を挟む、ショッピングモールで天文学展示にあわせて望遠鏡で星を見られるようにして参加のハードルを下げる、など。天プラでも六本木ヒルズをはじめとした都会でのイベントは数多く実施しているので、その経験とも合致します。

最後に、少人数でのグループワークがありました。与えられたお題は「フェイクニュースはびこる世で情報の正確性を担保する手段を考える」。簡単に解決策が見つかる話題ではありませんが、「情報は書き物として残し、伝える」「想像図

には想像図と明確に書き添える」「プレスリリースをきちんと出す」などが挙げられました。プレスリリースは日本では当たり前のように行われますが、科学ジャーナリストがいない国ではプレスリリースそのものがまれ。まずは一次情報をきちんと出すことが重要だという意見で、科学研究やジャーナリズムの規模によって常識が大きく異なるということを学ぶよい機会でした。全体としてはちょっと時間的余裕がなかったのが残念でしたが、アジア太平洋地域全体で活動を盛り上げていく最初の大事な一歩になったと感じました。